フットサルの参加目的、イメージ及び効果に関する研究
A Study of Participation Purpose, Image, and Effect of Futsal.

1K07B174-6　平田 祐喜
指導教員　主査 木村和彦 先生　副査 松岡宏高 先生

【緒言】

フットサルが近年、競技スポーツと生涯スポーツとしての両面で注目を集めてきた。1993 年の J リーグ開幕頃から日本のサッカー熱に伴い、「手軽にサッカーを」とフットサルが普及し始め、2007 年にはフットサル全国リーグである「F リーグ」が開幕し、本格的な競技スポーツとしてのフットサルも知名度を上げている。フットサル競技人口も、月刊体育施設によると選手登録していない人を含めると現在では 200 万人を超えていると言われている。それに伴い、フットサル施設数も急増してきている。

このように急速に発展してきているフットサルをさらに普及させるためには、現在フットサルを行っている人の基礎的な情報を知る必要がある。そこで、本研究の目的は、フットサルをプレーしている人は「どういった人がどのような事を目的としてフットサルを行っているのか、また実際にどのような事を実感しているか、そして、フットサルに対してどのようなイメージを持っているのか」を明らかにすることである。また、フットサル競技者の属性の比較を通じて、今後のフットサルの普及に必要なものについての提言を行うことを目的とする。

【方法】

フットサル施設利用者を対象として、競技者属性、フットサルをしている目的に関する質問、フットサルに対する意識に関する質問、フットサルをしての効果に関する質問を質問紙調査にて行う。質問紙調査の結果から競技者属性とそれ以外の調査結果との関係を比較し検証する。調査は 2010 年 11 月 9 日（火）、2010 年 11 月 13 日（土）にミズノフットサルプラザ調布、ミズノフットサルプラザ味の素スタジアムにて、フットサル施設利用者に質問紙調査をした。有効回答数は 191 人であった（有効回答率 98.5%）。

【結果と考察】

今回の調査対象者は 20 代男性会社員が最も多かった。フットサル競技者全体的には、フットサルに「仲間との交流」を目的としている傾向があり、フットサルを競技スポーツとしてより、生涯スポーツとしてプレーしている人の方が多いことが明らかになった。イメージでは「危険の少ないスポーツ」、「誰でも平等にできる」の平均値が低い傾向があり、「身近なスポーツである」の平均値は高かった。また、フットサルの実施頻度が多くなるほど、実感できている効果の平均値も高くなっていた。

目的をフットサル競技者別に比較すると、女性は「生活の充実」や「仲間との交流」などの平均値が高く、生活の質の向上やコミュニケーションツールの一つとしてフットサルをプレーしている傾向があることが予測される。また、年齢が高くなるほど、健康の為にフットサルをしている傾向があり、年齢が高くなるほど健康に対する意識が強まり、その対策としてフットサルをプレーしていると考えられる。

イメージをフットサル競技者別に比較すると、女性は目的と同じでフットサルに対して、生涯スポーツとしてイメージしている傾向があった。また、年齢が低いほどお金がかかるとイメージしていることが明らかになった。

効果をフットサル競技者別に比較すると、女性は気分転換、有意義な時間を過ごすという効果を実感できていることがわかった。また 30 代以上の気分転換、健康維持増進の効果も実感できている人が多いことがわかった。

【結論】

今後フットサルをより普及、発展させるために重要なことは、施設側はただコートを提供するだけでなく、それぞれの時間帯で利用者の目的にあったプログラムを提案することが必要になると考える。実施頻度を高める働きかけをすることで、フットサル競技者の満足度を高め、競技人口の増加や継続意識の向上に繋がるのではないだろうか。また、年齢が低い人ほど料金が高いとイメージしてしまっていることを改善するためには、今後フットサル施設は、それぞれの年齢層にあった利用料金以上の付加価値を付けていくことが重要であると考えられる。

フットサルに関する本や雑誌に多く見られる「危険の少ないスポーツ」、「誰でも平等にできる」というフットサルに対するイメージが、実際には全体的に得点の低い傾向があったことから、フットサルは危険が少なく誰でも平等に出来るスポーツであるというイメージを強く持ってもらうことが必要であると考える。

また、生涯スポーツとしてのフットサルが浸透している傾向がある一方で、競技スポーツとしてのフットサルの浸透はあまり進んでいない。しかし、エンジョイ志向の競技者の中には技術レベルも向上させることを目的としている人も存在している。そのような競技者に対し、F リーグ選手との交流やフットサル教室などで、競技志向の高い環境を提供していくことで、競技スポーツとしてのフットサルの普及にも繋がっていくであろう。